

2025（令和7）年度 相模女子大学・相模女子大学短期大学部 発想賞

本学はスローガン「見つめる人になる。見つける人になる。」を掲げ、「見つける力」としての発想力育成に取り組んでいます。この賞は、卒業研究・卒業制作等の学業の成果においてすぐれた「発想」をした学生を表彰するものです。（各研究科・各学科からの推薦文を掲載しております。）

相模女子大学発想賞

高橋 正（社会起業研究科）

AGRIGENIC：「農は万業の大本なり」を実装する都市近郊型サステナブル農業モデル

本研究では（もしくは「本論文では」）、低収益で担い手不足に悩む農業の構造的問題を解決する事業を提案している。当初は都市近郊でピーマンを中心に地産地消を実現し、二酸化炭素を直接吸収する新技術を活用し、難民や障害者を雇用する。立地、生産技術、ブランディング、販路、物流、雇用に関して具体的に検証しており、すぐに実現可能な事業計画である。農業経営、地球環境問題、社会福祉の3つを同時に解決する優れたビジネスモデルであると考えます。以上の理由で発想賞に推薦する。

角屋 桜雪（栄養科学研究科）

在宅経管栄養管理患者における微量元素欠乏と各栄養指標との関連

高齢化が進む我が国においては、在宅医療が推進され、在宅で経管栄養を受けている患者も多い。長期経管栄養施行患者において、銅、亜鉛、セレンなどの微量元素欠乏が報告されているが、複数症例、特に在宅経管栄養患者に関する報告は認められない。本研究は在宅経管栄養管理患者における微量元素欠乏の実態と投与栄養剤、栄養指標との関連を明らかにしており、アジア静脈経腸栄養学会（PENSA2025）でも高い評価を受けた。以上の理由で発想賞に推薦する。

宮崎 葵（日本語日本文学科）

黄庭堅の行草作品の変遷について

本論文は、黄庭堅の有紀年の行書、草書作品（行草作品）の書風の変遷についてそれぞれ4期に分け、それをもとに無紀年作品の年代推定も行った労作である。文献に依拠した先行研究の成果を様式面から実証して補訂した点に、中国書道史上の研究成果を得ている。また、卒業制作においても黄庭堅の「松風閣詩巻」を原寸で全臨し、論文で得た研究成果を書作にも反映させている。以上の理由で、2025年度発想賞に推挙する。

松阪 菜々子（英語文化コミュニケーション学科）

伝統柄×文化 ―伝統的な柄が若年層にもたらす異文化関心―

本研究は、日本・イギリス・中国・インド・南アフリカ共和国の伝統柄を取り上げ、それらが歴史・自然・価値観をどのように表象しているかを比較・考察したものである。伝統柄を、文化的意味を担う「視覚的言語」と捉える発想が独創的であり、文献調査による理論的整理に加え、ファッションや日常生活への応用可能性まで展開している。若年層の異文化関心を喚起する点で教育的意義も高く、発想賞にふさわしい学修成果である。以上の理由で発想賞に推薦する。

溝口 莉奈 (子ども教育学科)

日本におけるベビーシッター制度の現状と課題

本研究では、日本におけるベビーシッター制度の現状と課題について、子育てをしている保護者を中心とした167名にアンケート調査を実施し、利用が進まない背景にある意識や不安の構造を分析し、ベビーシッター制度の利用促進のための提言を行った。保護者のベビーシッターに対するニーズと課題を具体的に明らかにし、新たな子育て支援の観点として独自の発想から提言を行っているところに、この研究のオリジナリティがある。以上の理由で発想賞に推薦する。

金子 望乃佳 (メディア情報学科)

オリジナルヒーローと、そのアニメーションストーリーの制作『アニまるGO!』

本制作は、ヒーローと自身のペットを融合させたキャラクターデザイン作品である。ウルトラシリーズや関連グッズの調査・分析を踏まえ、心に寄り添う優しいヒーロー像を構築した。手描きタッチの全4話・約6分のアニメーション制作に加え、造形物や楽曲制作まで展開し、総合的な完成度に優れた作品である。「自分の思いをメディアで表現したい」という願いを具体的な形として示した卒業研究・制作として発想賞に推薦する。



三星 茂奈 (生活デザイン学科)

ひと粒の願いごと (卒業制作)

本学生は、大学生活四年間を通じてあらゆるデザイン領域において類まれなる才能を発揮し、優秀な成績を収めた。その成果が高く評価され、全教員一致により、本発想賞に推薦する。卒業制作『ひと粒の願いごと』は、絵本二冊・映像・空間展示で構成された総合的作品である。本作品では、「夜を照らす光」と言葉にならなかった感情を主題に、戦争によって光を失った森を舞台とする物語が描かれている。二冊の絵本は同一世界を異なる視点から描き、読む順序によって体験や意味が変化する構成となっている。本作は、現代社会に静かな問いを投げかける意欲作として高く評価された。

矢野 優真（社会マネジメント学科）

色とジェンダー

本学生は、色彩とジェンダーをテーマに、優れた研究を行った。色に対する好みは、感覚的な個人的志向のようであり、実は社会的に規定されていることをジェンダーの観点から説得的に論じた調査研究である。多様性を認めていても、身近な人や事柄については、型にはまった男性像・女性像から自由になることが難しい状況をリアルに描きだした。ゼミナールにおける積極的な学びとその成果を評価し、発想賞に推薦する。

寺田 来冬（人間心理学科）

やさしい人は本当にやさしいのか～曖昧なやさしさの分類化～

本学生は、卒業研究において、多くの人が善いことと評価する他者に対する態度である「やさしさ」を取り上げ、それがいかなる意味で「やさしさ」と言えるのかを、その語が使われる様々な場面を分類し、それらを分析した。誰もが何気なく使っている日常語である「やさしさ」という語を敢えて取り上げ考察するその着想の妙と、それを丁寧な哲学的考察によって分析する手法の確かさは評価に値する。ゆえに発想賞に推薦する。

彦根 花咲（健康栄養学科）

ナリルチンを用いた抗腫瘍効果の検討

本学生は卒業研究として、柑橘類の果皮に多く含まれるフラボノイド成分であるナリルチンおよびそのアグリコンであるナリングニンに着目し、まだ十分には解明されていない消化器系がん細胞への抗腫瘍効果を検討した。結果、肝臓がん細胞に対して、濃度依存的、時間依存的な増殖抑制効果を見出した。本研究成果は、抗がん作用を有する食品成分の疾病予防への展開に大きく貢献するものであり、発想賞にふさわしいと考える。以上の理由で発想賞に推薦する。

相模女子大学短期大学部発想賞

大和田 眞杏（食物栄養学科）

高齢者向け高たんぱく質朝食の提案及びリーフレットの作成

本研究はフレイル予防朝食献立を作成し、後期高齢者ら6名へ4日間の自宅調理を依頼し、調査結果をまとめたものである。フライパンやそばろ調理による手首の負担、15分の立位の困難さなど、机上では見過ごしがちな高齢者視点を「見つける」に至った。学生自らフレイル予防に取り組み、地域高齢者が継続して朝食を調理できる環境づくりの礎となる研究である。このプロセスは「見つける力」の「発想力」を体現しており、よって発想賞に推薦する。

以上